
雪螢

天海 沙月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

雪螢

【Zマーク】

Z3290B

【作者名】

天海 沙月

【あらすじ】

昔、医大生に助けられたことから、医者を志した柊一は、ある時、事故に合い、気づくとまったく別の場所にいた。

(前書き)

この小説は、テーマ小説「雪」参加作品です。
他の先生方の作品は、「雪小説」で検索する事が出来ますので、是非ご覧下さい。

あの頃もこんな雪だつたつて、と舞うよひに窓の外を落ちていく白雪を見ながら長谷 栄一は目を細めた。

それは幼い頃の、懐かしい出来事。栄一は大怪我を負ってしまつたのだった。壮絶な痛みと苦しみで薄れゆく意識の中、螢のように淡く光る雪だけが音もなく空を踊り、そんななんでもない光景がその時は少し怖く思えた事を栄一は今でもよく覚えている。

そして、こつちは栄一の記憶があぼろげな部分なのだが、その時、彼を助けてくれた医大生がいた。医大生はまだ医師免許を持つていなかっため、応急処置しか出来なかつたそうだが、その処置が的確なものだつたため、栄一は一命を取り留めたのだ。その影響もあってか、栄一は医者を志した。

それから。彼はとにかく勉強した。やんちゃだつた幼い頃が嘘のように。そして 彼は念願叶つて、医大生となる事が出来たのだ。彼は、思つ。もし自分があの医大生と同じように、事故の現場に居合わせたら、そこにいる人を助ける事が出来るのだろうかと。

1

「長谷くん」

後ろから声をかけられた。声の主は、金井ハル。見るからに活発そうなショートカットの髪と、おしゃれより動きやすさをメインにした服装が印象的な、栄一の同級生だ。

「救命講習、行くでしょ？ 一緒に行かない？」

「ああ、いいけど」 そう言つと、ハルは嬉しさを顔いっぱいに滲ませて微笑んだ。週末に予定していた救命講習。栄一とハルは、学校での予習・復習を兼ねて、心肺蘇生の他、外傷手当や異物除去、搬送法など、一日かけて行われる「上級」の救命講習に参加しようと

していた。

「じゃあ、後で待ち合わせとか話し合おう」

「うん」柊一は人と会話をするのが得意ではないため、どうしても短い受け答えになつたしまう。けれど、ハルは満面の笑顔で柊一に手を振つて、次の授業へ向かつた。

*

「中々ハードね」ぼそりと、ハルが呟いた。柊一もそれには同感だ。さすがに一日がかりとあって、救命講習も楽ではない。特にハルは動作が素早く、くるくるとよく動くので、柊一よりも疲労の度合いは高いだろう。柊一は条件反射のようにぶつぶつと呟いた。

「疲労の原因には次のようなもののが考えられる。

1・エネルギー源（食事）の不足。食事により十分なエネルギーの摂取が行われないと、疲労が起こりやすくなる。俗にいうしゃりバテである。

2・疲労物質の蓄積。活動に伴い、筋肉中に乳酸などの疲労物質が蓄積することで筋肉の収縮が妨げられ、疲労す

「黙れ」

「はい、すみません」

ハルを怒らせない方が賢明だろう。

「うー、まったくその工〇は不公平だ。長谷くんの脳みそは是非とも私に移植すべきなのだ」

柊一は苦笑した。最初はリストのように頬を膨らませていたハルも、次第に笑い出す。

「あははは、そんな馬鹿なこと言つてないで、行動しなきゃだよね」

ひとしきり笑うと、ハルは、すつと立ち上がった。それからの彼女の活躍ぶりたるや、それはそれは凄まじいものだ。行動の一つ一つに気合が入つていて、周りにまでやる気が伝わってくる。柊一

や他の人間がハルといて気持ちが良いと思える部分が、まさにそことだ。ハルは良い意味で周りを巻き込むような力を持っているのだ。

その日の講習は、滞りなく終わった。内容は止血の方法といったものから、心臓マッサージまで様々だ。

講習を終えた二人は、ハルの運転する車に乗つて帰路を辿る。ちらほらと、電燈の灯りに透けて、螢のように淡く輝く雪が、周りに降りそそぐ。

けれど。

「！」

突然、前方を車のライトから放たれる光が覆つた。
対向車だ。次いで、悲鳴のように鋭いブレーキ音が響く。ハルは急いでハンドルを切るが、間に合わない。

「！」

瞬間、激しい衝撃が一人を襲つた。

2

「おい、いきてるか？ おきるよ、おっさん」

「お……」

おっさん呼ばわりとは何事だ俺はまだ二十であり髪も余裕でフサフサな訳で断じておっさんなどというものではない、と心中で過剰なまでの突つ込みを入れつつ、柊一は飛び起きた。

「あ、おきた」

「……？」

柊一は周りを見回す。「ここはどこだ？ 車の中ではない。隣にいた筈のハルの姿も見当たらなかつた。

しかも、空がまだ明るかつた。さつきまでは確かに夜だつたといふのに。

「なにキヨロキヨロしてんだよ、ふしんしゃー」

今度は不審者かよ。

田の前に、『青空公園』といつ看板があつた。じつやら自分は今、公園にいるらしい。

隣にいる口の悪い少年は小学校低学年ほどで、いかにもな、やんちゃ盛りだ。柊一と話す傍ら、雪玉を『じらうては、遠くの木を田掛けて投げている。

「僕と同じくらいの年のお姉ちゃんを見なかつたかい？」

「しらない。おっさんしかいなかつたよ」

ハルは一体どこにいったのだろう？ それに、どうして自分は公園にいるのか。確かにハルと共に交通事故に合つたはずなのに。

そうだ、携帯。

携帯でハルに連絡をとろう。柊一はズボンのポケットから携帯を取り出しが、アンテナは一本も立つておらず、『圏外』の表示がされていた。

「おかしいな……」携帯の電波が届かない程のド田舎には見えないのだが。それよりここは……。

なんだか、見覚えのある町並みだな。

柊一は転勤族だつたため、各地を転々としてきたから、もしかすると昔、この辺りを訪れた事があつたのかもしれない。

仕様がない。少し歩き回つてみるか。

「なんだよ。もういつちやうのか」

柊一など気にも留めていないかのように、雪玉を投げ続けていた少年は、意外にも、柊一を引き止めるような仕草を見せた。

「このへん、いなかだから、としおちかいことかもあんまいなくて、おれいっつもひとりなんだ」

これは、遠まわしに、柊一に遊んでくれと言つてているのだろうか。

柊一は暫し逡巡したが、手のひらで雪をすくいとつて固めると、その雪玉を思いきり遠くへ投げた。少しくらいなら構わないだろ？ それに、迷つた場合はその場を動かないのが鉄則だ。

にやりと笑つて、柊一は尋ねる。『これより遠くまで飛ばせるか

？」

少年は言い返す。

「おれのまつがとおくまでとばせんよー」

そして、せつせと雪玉を作ると一生懸命投げ始めた。

「何て名前？」

「イチ！ なんばーわんのイチ！」

イチと柊一か。中々似てるな。

「うわ、冷た」

柊一の雪玉に中々届かない事をすねたイチが、柊一本人をめがけて雪玉をぶつけてくる。

「この。お返しだ」

柊一は雪玉を投げかえした。威力は出さず、やんわりと。いつの間にか始まった雪合戦の中、一人は雪玉を投げ続ける。日が落ちて、イチが帰つてしまつまで。

3

今日は町まで行つてみよう。その日、柊一は早くから行動を開始した。昨日の見た事が本当だつたら大変なことになる。

昨日 イチと別れた後、柊一は途方に暮れていた。何故かお札が使えないのだ。近くのコンビニで使おうとして、偽札だ、と言われ職務質問をされかけた。頭をフル回転させてその場はどうにかなつたが、お札が使えないのでは泊まる場所がない。加えて、この雪。野宿などしようものなら、凍死してしまう可能性だつて十分にあるのだ。

「あんた、さつきから何してるんね？」

その時、うわづらとさまよつた柊一を不思議に思ったお婆さんが声をかけた。

「あんれ、雪まみれじゃないかい。さあさ、入りなさい」

柊一の事情を聞いたお婆さんは、暖をとらせてくれたばかりか、

今夜は泊まつていけと言つてくれた。もちろん、『」飯付きだ。田舎ならでは、といえる暖かさに、柊一は感謝する。

「？」

けれどひとつ、奇妙な事があった。

「これは、今年のカレンダーですか？」

「ああ、そうさね。もうすぐ終わりだよ」

『今年の』カレンダーだつて？

柊一は信じられなかつた。それもそのはず、カレンダーには確かに『1994年』と大きく記してあつたのだから。

今は、2006年。それは紛れもない真実だ。それなのに何故？

考えれば考えるほど、自分は過去にいるのではないか、と思えてくる。何より、それだと携帯とお札の説明がつくのだ。

だが、それはあまりにも非現実的で、到底信じられたものではない。結局その日、柊一は寝てしまつことにした。田を覚ませば、元の世界に『』ることを祈りながら。

*

「おはよう」やることある

「おはようさん。むつとゆつくつ寝てもいいかつたん」「

「今日は町の方まで行つてみよつかと思いまして」

「町ねえ。今日は雪がひどくから止めといたほうがいいんじゃないかい？」この辺は山だから、町ならバスを使うとええわ。転ばんようにな」

「わかりました。本当に、どうもありがとうございました」

「気にかかる」とないわね。『』いつも話しあう相手がおらんもんで寂しかつたから

お婆さんは、また来なよ、と柊一を見送つた。土産におにぎりまで持たせて。本当に、何から何まで、感謝してもし足りない。

柊一はお婆さんに向かって一礼すると、バス停に向かって歩き出した。

「あいかわらず凄い雪だな……」

しばらく歩くと、『スリップ注意!』の看板があった。やつきのお婆さんも転ばないよう言つていたし、びつやひの辺は滑りやすいらしい。

「ひとり」と地面を揺らす音がし、バスが停止すると、柊一は財布から小銭を出して、車内に乗り込んだ。一応、平成6年 西暦1994年以前の物を使う。

「あれ？ イチじゃないか」

田舎の早朝ともあって、車内はがらがらだったが、一人、見知った少年が乗っているのが見えた。

しかし、当のイチは、へ？ という顔をしている。まあ、小学校低学年の記憶力なんてこんなもんだろう。

「昨日公園で遊んだだろ」

「ああ、きのうあそんでやつたおっさんか」

なんだか突っ込みどころ満載の台詞だったが、相手は子供なので、許す事にする。

見たところ、イチの近くに母親などの、保護者はいない。それどころか、車内にいるのは、運転手を除けば、イチと柊一だけだった。

「人みたいだけど、どうしたんだ？」

「いえで」

「……」

まだ小さいのにすごい行動力だな、と柊一は少し感心してしまった。

「あのおやじ、サイアクだ。おれのはなしなんてちつともきかない」
俯いてふてくされながら、イチはぽつぽつと話し始める。自分にもこんなことがあったなあ、と柊一は思つた。親子喧嘩は、人生において避けては通れぬ問題だ。

「いびきはす」いし、あしもくさい」

それは関係あるのか？ と思いつつ、柊一は、ぽんとイチの頭に手をのせた。

そして、次の言葉を紡いだとした、その瞬間だった。

「うわっ！？」

甲高いブレー キ音と同時に、ギュウと氷の上でタイヤが軋む。けれどバスは止まらない。

スリップした！

柊一がそう認識したかと思うと、ガシャンと窓ガラスの割れる音とイチの悲鳴がし、床に勢いよく体を叩き付けられた。

どうやら、スリップしてカーブを曲がりきれずに、バスの後部がガードレールにぶつかってしまったようだ。

「お客さん！ 無事か！？」

「痛……っ

右肩に痛みが走る。しまった、肩から落ちてしまった。触れてみると、明らかに骨の形がおかしい事が解る。どうやら、脱臼してしまったようだ。

「イチ！？ しつかりしろ！」

イチの頭はぱっくりと割れて血が流れ、腕の骨も折れているようだ。だが、そんなことよりも。

「まずいな……」彼の小さな足が、バス座席の下に挟まってしまっているのだった。

「イチ！ 返事しろ！」

イチはまだ小さい子供だ。全身を叩き付けられて、無事で済む筈がない。そうだ。ここはバスの中だ。それなら……。

「運転手さん！ 無線で連絡を！」

「あ、ああ」

とりあえず応急処置を。

まさか、こんなに早く救命講習の成果が試されるとは思つていなかつた。ここにハルがいてくれたら、と柊一は思つたが、今ここにいない人物の事を考えていても仕方がない。しかし、イチの方へ伸

ばそつとした右腕が、脱臼によつて動かせなかつた。柊一は半秒迷う。素人が無理やり脱臼した骨を入れようとすると、軟骨が磨り減つてしまつ恐れがあるのだ。けれど、今は、イチの命がかかつてゐる。柊一は大きく一回首を振ると、意を決して、左手で思い切り腕を引っ張つた。「……っ！」触れるだけでも痛いといふのに、無理やり引っ張るとなると、その痛みは何倍にも跳ね上がる。

と、しばらくし、すう、と痛みが引いた。骨が正常な位置に戻つたのだ。「よし！」外れた骨が元通りに入りさえすれば痛みが無くなるといつのが、唯一脱臼の良い所だ。

「イチ！」

「うわあああああ！　いたい、いたいよ」

再度呼びかけると、イチの悲鳴が返つて來た。叫ぶ事が出来るのならば、ひとまずは大丈夫だらう。

「待つてろ。やれるだけのことはするからな」

先ずは、足を座席の下から抜かなければ。

柊一はイチの上体を引っ張つて、座席の下から引き上げようとする。

雪。

音も無く、外の灯りを反射させた雪が、萤のよつに淡く光りながら舞い落ちる。

そんなんでもない光景を、其の時イチは少し怖く思つた。

いえでなんてしなければよかつた、と痛みの中でイチは思つ。「おとうさん……」今となつては、さつき喧嘩したばかりの父の大きな手が懐かしかつた。しかし、イチの手を握つて励ますのは、別の手だつた。父の手のよつに大きな、柊一の手。

いつか。

いつかぼくがおおきくなつたとき、こんなふうにだれかをすけられるかな。

何時か自分が成長した時、誰かを助けたいと思つてた。

このおにいちゃんみたいに。

あの時、助けてくれた人みたいに。

……

3

「おーい、無事かーー!?

助けが来た。柊一はほつと胸を撫で下ろす。

「もう大丈夫だぞ」

そう言つた柊一の声を皮切りに、イチは再び意識を失つた。そして、イチは直ちに救急車へと運ばれる。

柊一は、一緒に救急車へ乗り込もうとして 「うわ!？」

つむりと、勢い良くすべつた。しまつた、ここは滑りやすいんだつた、と思い出しが、もう遅い。柊一は、激しい衝撃に見舞われた。

「あれ? もう一人の兄ちゃんは何処行つた?」

「もう一人の兄ちゃんつて、医大生の? 応急処置が的確で助かつたよ」

「そなんだけども、何処にもいなくてなあ……さつきまで確かにいたのに」

「そついえば、何処だ?」

「……くん、長谷くん！」

ハルは柊一の肩を掴んで揺さぶるが、返事はない。そういうえば、交通事故では運転席よりも助手席の方が危険なんだっけ、とハルは思った。そうして、呼吸が正常か確かめようとしたとして、ハルは顔面蒼白になった。

「息してない！？」

ハルはパニックになりながら、必死でわざとぞの救命講習のことを思い出そうとする。じつじつとやは……。

「……まうすとうーまうす」

と、突然柊一が咳き込んだ。

「わっ！？」

「げほっ、金井……？」

「良かつたあ……」

田を覚ました柊一は、安堵と喜びを滲ませたハルの顔に迎えられた。

戻ってきたのか。

もしかして今のは夢だったのでは、と柊一は考える。だとしたら、なんてリアルな夢だろう。ふつと、大きく息をつくと、イチは大丈夫だったかな、と柊一は思った。

「イチ！」

「とうちゃん」

イチの父は、息子が無事な事を確認し、ほつと胸を撫で下ろすと、「まったく、お前はさんざん心配かけさせてー」

その剣幕にイチは首を竦めたが、「何はともあれ、柊一が無事で良かつたわ」と、母が優しく声をかけた。

どうやら、彼の乗ったバスには、一緒に医大生が乗っており、その応急処置が適切であつたため、衰弱もさほど酷くならずには済んだといつ。

「……かつこよかつた」

「？ 何が？」

イチはにっこり笑うと、言った。

「おれ、『いだいせい』になる」

イチ 長谷川一が医大生となり、再びバスのスリップ事故に巻き込まれる事になるのは、まだまだ先の話である。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3290b/>

雪螢

2010年10月8日15時36分発行